

平成 23 年 1 月 12 日

東京フォーラム

於：湯島聖堂

中斎塾 東京フォーラム

平成 23 年 第 1 回講話

ひらめき

明けましておめでとうございます。本年もよろしくお願ひ申し上げます。お寒い中をよ
くいらっしやいました。

今日、皆様にご紹介する本は、『國の個性』（木内信胤著 プレジデント社）です。この
本はこれから日本がどのように生きていけばよいか、日本人がどう生きるべきかをメイン
テーマに書かれています。その中で、大事なものは直観力である。直観とはどういうもの
なのか、ひらめきとはどういうものか、この本はまさにその〈ひらめき〉で書かれている
と序にあります。

中身を見ると、「アメリカは驚くほどの勢いで落ちていくだろう」と書かれています。こ
の本は 1986 年に発行されていますから、木内先生の直観力がいかに素晴らしいか分かりま
す。

言葉の威力

今年が始まってまだ数日ですが、

年が明けてから今日までの間、嘘をつかなかった方？

年が明けてから今日までの間、良い日の連続だったと思う方？

年が明けてから今日までの間、有難うと言ひ・有難うと言われたことが連続してあ
った方？

年始めですから、一年間分のものをお聞きします。

今年には嘘をつかない。嘘との縁を切っていこうと思っている人？

嘘をつかないでいこうと思っていなければ、やはりどこかでちょこちょことリップサー
ビスや何かが出ます。ですから〈今年には嘘をつかない〉と思って、出来れば声に出して言
うと良いですね。或いは、書いたものを貼って、朝起きた時や寝る前に読んでみる。声に

出して言うことの大事さを、今年は意識されると良いと思います。

今年は良い年にしたいと強く思っている人？

強く思えば思うほど、だんだん口に出てきます。すると自分にとって良い年とは何だろうと考え始めます。すると、これとこれをすれば良い年になると思う。そうすると今度はそれを書き始める。書いてみると、口に出して言いたくなる。そうすると周りの人にも教えたいくなる。この循環が出来ると、良い年になります。

今年は有難うと積極的に言い、有難うと言われるような環境作りを進めたいと強く思っている人？

積極的というのは結構難しいものです。積極的に思っているけど、強く言っていないとどうしても心が弱くなってしまいます。

言葉について私の体験談を申します。昨年は1日15,000歩歩くといいまして、今年も歩いています。ところが今年は、とても寒い。特に朝早い時間はまだ暗くて、6時半くらいになると多少明るくなっていますが、普通に歩いていると身体が風で飛ばされます。冷たい風が横殴りに強く打ち付けてくる時は、真直ぐ歩けません。今くらいに日差しがあって、ぼかぼかして気持ちよく歩ける時は、不思議と色々な問題を考えながら歩けるのですが、朝早く冷たい風が吹き付けて、氣を張っていても身体を持っていかれそうな時は、言葉を使います。「胸を張って、胸を張って、力強く、力強く」と唱えながら、風に向かって歩きます。そうすると不思議と背筋が伸びて、風に負けないで真直ぐ歩けるようになる。朝の呪文です。飽きてくると途中で呪文を変えて、「これは仕事、これは仕事」と言ってみたり、「歩くが仕事、歩くが仕事」と言いながら歩いています。朝方10,000歩くらい歩くのですが、この3つの呪文でだいたい歩けます。

言葉というのは、身体に力を与えてくれます。不思議なものだと思います。プラスの言葉を言っていると、潜在的な力が出てきます。言葉を上手に使えば、自分自身の持っている潜在的なエネルギーが出ます。言葉の威力です。自分が困った時には、何かプラスの呪文を考えて、それを朝となく昼となく唱えることによって、潜在的なエネルギーを得ることが出来ます。

論語は述である

では、論語にまいりましょう。論語の素読は立ち上がって、若干目線を上げたところにテキストを掲げ、腹の底から気持ちの良い声を出す。声を出した後に、爽やかな氣分に包まれる。そういう読み方がよろしい。あとは、読みながらイメージが浮かんでくれば文句

はない。では、まいります。本日の論語は述而第七 1~9 です。

解説を致します。

【一】 子曰く、述べて作らず。信じて古を好む。竊に我が老彭に比す。

孔子が言うには、昔の人が言っていることを私はただ伝えているだけで、自分で考え出して話しをしているわけではない。古人が作ったものを素晴らしいものだと信じて疑わず、一所懸命伝える努力をしているだけだ。昔の人の言葉を私は信じて疑わないし、昔の人の言葉は非常に好きである。そっと私は老彭という人物を尊敬しているし、老彭のようになりたいと思って真似をしている。

孔子が論語について話をしたわけです。述とは論語の核(コア)をなすものだと思っています。よく、「論語は仁である」という言い方をしますが、私は「論語は述である」と思っています。述とはバトンタッチです。素晴らしいものを受け継いで次世代へ伝えていく。これが論語の基本的なものの考え方(核)になっています。「述べて作らず」とは、かなり重い言葉です。

「我が老彭」とは、非常に親しみを持つ言い方ですが、ここは「竊に吾を我が老彭に比す」と読んだ方がすっきりします。

孔子には、老彭というお手本にしたいと思う人物がありました。渋谷栄一さんは、孔子が老彭に比すのであれば、私は孔子をお手本にしたいと思って一生涯を貫いたと書いています。どこかにお手本があると良いですね。お手本というのは、人格をもって迫ってくるものが良い。人格を感じないものは、お手本にはならないと思います。私は木内信胤先生という人格に触れたことで、お手本が出来たと思いました。お手本を探しはいくつになっても必要だと思います。

【二】 子曰く、黙して之を識し、学んで厭わず、人を誨えて倦まず。何か我に有らんや。

孔子が言うには、黙って覚えて学んで飽きない。人を教えて嫌にならない。このようなことは自分にとって何でもないことだ。

教える人がこういう心境になれば素晴らしいと思います。教える立場にある人は、この文章を何度も見直す必要があるのではないかと感じます。

【三】 ^{しいわ}子曰く、^{とく}徳の^{おさ}修まらざる、^{がく}学の^{こう}講ぜざる、^ぎ義を^き聞いて^{うつ}従ること^{あた}能わざる、^ふ不善^{ぜん}改^{あらた}むること^{あた}能わざる、^こ是れ^わ吾が^{うれい}憂なり。

孔子が言うには、道德の修養が足りない。学問を深く掘り下げられない。忠告を受けても従わない。過ちを知りながら改められない。これが私の心配事である。

孔子が道德の修養が足りないなどとは考えられませんから、周りをみてそう言っているのでしょうか。孔子がお弟子さんたちに、「これが私の心配事だ。お前たちも一所懸命頑張りなさい」と言っているようにイメージすればよいでしょう。

郷学研修所にある安岡正篤先生の蔵書を見ると、その量もさることながら、そこに書き込まれているメモをみると、学問の深さに圧倒されます。てっぺんを目指して登っていても、逆さの富士山を登るように、どんどん広がってとてもとても辿り着かないと感じます。安岡正篤先生のような人と比較をしたら、「学の講ぜざる」となると思います。

もっとも、学問をしたと言っている人も、どこまで学問をしたのかと疑いたくなる人は周りを見ても多いですね。例えば先日の新聞で、NHKの会長人事で、慶応義塾の前塾長の安西さんがいったん承諾したものを拒絶したとありました。泥仕合があったようですが、学問を深く掘り下げて自分の身に付いていた人であれば、こういうごたごたはしない方がよいと思います。どこまで学問を身につけたのかなと思ってしまいました。

【四】 ^し子の^{えんきよ}燕居するときは、^{しんしんじよ}申申如たり、^{ようようじよ}夭夭如たり。

孔子が役所から自宅に帰った時には、のびのびしてゆったりとして、顔色良くニコニコしている。

こういう生活がいいなと私も思います。中村天風先生のように、午前中は自分の時間と決めると、裸で体操をしたり本を読んだり色々な使い方ができます。自分自身で使える時間は、ゆるゆるのびのびした時間がいいなと思います。のびのびしてゆったりして、誰でもちょっと寄って行きたくなるような、非常にくつろいだ雰囲気的时间を、一日のうちで何分でもよいからお持ちになるとよいですね。そうすると心がゆったりして、そこから柔らかなものが出てきます。

今の政治家も、申申如たり夭夭如たる時間を意識して持つとよいですね。そうするとき

すぎすした顔も少しは和らぐと思います。

【五】 子曰く、甚^{はなは}だしいかな、吾^わが衰^{おとろ}えたるや。久^{ひさ}しいかな、吾^{われ}復^{また}夢^{ゆめ}に周^{しゅうこう}公^みを見ず。

私の衰え方は酷いものだなあ。もう長い間、夢で周公を見なくなった。

周公は周王室の基礎を作った人です。周公の生きざま・政治が孔子にとって非常に素晴らしい理想的なものであったわけです。ですから夢によく見たのでしょう。それがはっと気がついたら、夢に周公が出なくなった。自分も氣力・体力が衰えたなあと述懐をしています。

孔子は 73 歳で亡くなったのですが、魯に帰ったのが 68 歳の時なので、その当時としては長生きですが、やはり氣力・体力が衰えると人間そう長くはもたないなと感じます。

以前も申しましたが、昭和 22 年あたりで男性の平均寿命が 50 歳を初めて超えました。それからあれよあれよという間に、日本人の寿命は延びました。洪沢栄一さんも、「長生きをした人が勝ち」と言っていますし、木内先生もそう言っておられました。

周りの見渡しても、90 歳を過ぎて矍鑠としておられる人はいます。私が詩吟を教えて戴いている坂本坦道先生も 90 歳を過ぎて脳梗塞を患いましたが、だんだん回復して、今は詩吟を朗々と詠じておられます。坦道先生は 100 歳で大勢の人の前で詩吟を吟じたいという願望を持っておられるので、それだけの強烈な願望があると長生きするものだなと感じます。

【六】 子曰く、道^{みち}に志^{こころざ}し、徳^{とく}に據^より、仁^{じん}に依^より、藝^{げい}に游^{あそ}ぶ。

学問を修める時の順序を言っています。

学問をしたいと思ったら、人間としての道を目指しなさい。それが実行できるようになると、道徳というものが理解できて、心に悟れたものが徳である。

人間としての道を目指して、その結果、徳が生まれて、それが更に進んでいくと、私欲がなくなり心の中の徳が完全になる。これが仁である。その結果、芸（その当時の貴族の教養といわれるもの。礼・楽・射・御・書・数）を身に付けて、自由自在に使える。

日頃の行い全てが遊んでいるように見えるけれども、全部仁に根ざした動きになってい

る。とてもとてもここまで達していませんので、私にも分かりません。想像するしかありません。

【七】 子曰く、束修しゅうしゅうを行うおこな自り以上よ いじょうは、吾未われ いまだ嘗てかつ おし誨なうること無くんばなあらず。

束修とは授業料です。当時で言えば、干した肉十本を進物として持って行ったとあります。孔子が言うには、授業料を受け取ったら、私は今まで教えなかったことは一度もない。

以前私は、石川梅次郎先生のお宅に伺って論語を教えて戴いておりました。その際、授業料と言うと先生が臍を曲げられるだろうと思いましたので、封筒に束修と書いてお渡ししました。先生は「ふむ、束修か・・・これは教えなければいけないな」と言われた言葉が頭に残っています。束修を持参して何かを教わるというのは非常に好いものです。いくつになっても、教わるというのは良いものだと思います。

【八】 子曰く、憤しんせざればふん啓けいせず。悻ひせざればはっ発いちくうせず。一隅あを拳さんぐうぐるに、三隅もっを以てかえ反すなわさざれば、則ふたたち復かえびせざるなり。

「憤」というのは、公憤です。心の底からエネルギーの塊が湧き起ってくるものと捉えて下さい。これは先ほどご紹介した本で木内先生の言われた「ひらめき」と同じです。ひらめきは直観です。長い間思い悩んで一所懸命考えていたもの、どうしても分かりたいと強烈に思っているものが、何かの作用ではっと突然分かる。木内先生は、一枚の葉っぱがひらひらと落ちてくるのを見て、はっと悟る。これがひらめきだと言いました。こういう状況になっている人を、孔子は「憤」と言っています。

孔子が言うには、一所懸命学んでいるけれども、まだよく知ることが出来ないで煩悶している。そういう状況でなければ、教えてやらない。公憤を持っていない人に教えてあげようと思っても、響かない。

心で分かっている口に出して言えないような状況でなければ、言い表せるように教えてはやらない。

一つの隅を説明すれば、あとの三隅は自分で考えることが出来る。そういう能力を持っていないなら、再び教えることはしない。一ヶ所を説明してあげれば、他の三つはこういうことだろうと類推して師匠に反問してくるような力を持っている弟子でなければ教えられる。

【九】 ^{し も あ もの かたわら しょく} 子 喪有る者の 側 に ^{いま かつ あ} 食すれば、未だ嘗て飽かず。子 ^{し こ ひ おい こく} 是の日に於て哭すれば、
^{すなわ うた} 則ち歌わず。

孔子は情の人だなと感じます。

孔子は葬式で食事をする時に、悲しみのあまり十分満足して食べることはなかった。悲しみのあまり声をあげて泣いたならば、その悲しみがずっと残って、歌を歌うことはあり得ない。

今日の論語の中で重要な部分は、論語の基本は述（バトンタッチ）です。昔の人が素晴らしいことを作って、それを自分で発展させて、それを次の世代に渡す。人間はこうあるべきだというのが述です。これが論語の基本であり根幹です。

今日の論語の中で良いなと思ったのは、「黙して之を識し、学んで厭わず、人を誨えて倦まず。何か我に有らんや」・・・こういう学び方・教え方が良いなと思いました。

それから「子の燕居するときは、申申如たり、夭夭如たり」・・・自分自身がのんびりゆったり出来る時が良いですね。

大局観 新聞を読む三つの視点

今年、大事なものは大局観だと思っています。色々な情報が沢山入りますから、それを判断することが必要です。判断する場合、判断の三原則「本質・大局・歴史」を是非、今年活用して戴きたい。それが身につけば、実行です。実行については、知識・見識・胆識を意識して戴くとよろしい。大局観をずっと見つめていれば、自動的に判断の三原則と知識・見識・胆識に入るとしています。

具体的に、私が今年、新聞をどう読むか。気にしているのは3つです。

一つは、民主党がどれだけ無様なことを何時、どのようにするか。民主党が無様なことをすればするほど、日本は坂を転げ落ちます。今年私が見るテーマは、日本が坂を転げ落ちている状況が、何時どれだけ国民に分かるようになるか。日本が坂を転げ落ちていると実感するのが今年で、これから先ずっと坂を転がっていきます。どこまで落ちていくか、その鍵を握るのが民主党の動向です。民主党の無様な動き方によって、向こう2年、3年、4年、5年と続いていく可能性があると思っています。

二つ目は国債です。今日の読売新聞に日本の民間銀行の国債の保有残高が2年前と比べ

て1、7倍の143兆円になり、預金の四分の一が国債で運用されているのが現状とありました。2008年9月に83兆円の保有残高が、2010年の9月末には143兆円まで膨れ上がっています。ということは、国債が格下げされると凄まじい含み損が出て、銀行はお金のやり繰りが出来なくなります。国債の動き方によって、日本の動きも極端に変わってきます。国債が今どうなっているか、意識して見ていたいと思っています。

三つ目は災害です。今日は大野参与がお見えになっているので後ほどお話戴けると思いますが、災害については、特に鳥インフルエンザ、伝染病がどうなるか気になります。又、地震・津波・大火事・山崩れといった自然災害が、日本人が弱っている時に襲ってくると思います。そうすると連鎖反応で大きな災害が起きると思っています。

以上の三つが私が新聞を読む時に氣をつけて見ているところです。氣をつけて見ていると、例えば仙谷さんが問責決議が可決されたにもかかわらず居座っているのは何故だろうか、何故か、何故か・・・をずっと突き詰めていくと、或る日突然“何だ！そういうことだったのか”と分かる。これが「ひらめき」です。勘も同じです。人間の心というのは結構たいしたもの、一つの問題をずっと追及して考えていくと、ある日突然はっと分かる。この心のひらめきを重要視して、理屈は後から付けるものです。結論が最初に出るわけですが、結論はひらめきによって導かれるものです。

私が民主党の無様と言ったのは、これから出てくるであろう公約の見直し・撤回です。鳩山さんが衆議院議員を辞めると言ったにもかかわらず、すぐに発言を撤回しました。民主党はその轍に倣って、どんどん公約の見直しをするでしょうし、公約違反をすると思います。公約違反の仕方が、国民が仕方ないと納得できるようなやり方をするか、とんでもない無様なやり方をするか、そこらへんが見所だと思っています。ですから今年は意識して、先ほど申しました民主党の動き・国債・自然災害をチェックしていきたいと思っています。

今年の干支は辛卯です。辛は辛く・酷く・苦しい。卯は安岡先生の流れで見ると、萱や芒が覆っているドアを無理矢理開くと向こう側には難問が山積みされている、という安岡先生の解説を他の人も踏襲しています。私はもう一点、卯には殺すという意味がありますから、いけにえの羊や牛を殺すという意味が卯という文字に集約されていますので、今年は辛く・酷く・苦しい年で、死ぬ人が沢山出ます。

最後に一つ付け加えると、今年は生活保護費が膨れ上がって大変なことになります。統計がありませんのでどこまで本当か分かりませんが、日本国行政の予算全体の1割ぐらい

を、今、生活保護費が占めているという数字が出ています。これが 3 割くらいを生活保護費が占めるようになったならば、行政は破綻します。足立区ではホームレスを救急車が収容して病院に連れて行っても、病院はお金を先に要求して、払えない人は受け入れないという対応をしているそうです。これは、行政からお金を払えないという通知があったので、そうせざるを得ないのだと思います。

ですから今年は、お金が無くて、無い袖は振れぬという話が随所に出てくると思います。我々は無い袖を少しずつ絞って貯えるように、少しでも振れるようにしたいなと思っています。

以上で、新年最初のお話にさせて戴きます。有難うございました。